

ツブカル山（4 167m）はアトラス山脈の最高峰であり、アフリカの北部にあるモロッコに位置する。日本ではなじみが薄いですが、距離的に近いせいかスペイン・フランス・ドイツの人などに会った。また、カナダから来ている人もいたので、やはり北アフリカ最高峰というのは魅力があるらしい。ハンフリー・ボガードとイングリッド・バーグマンの映画で有名な“カサブランカ”はモロッコ最大の都市である。

カサブランカの飛行場で我々を迎えてくれたモロッコ人ガイドはカワ・モハメドさんである。なんと日本語べらべらである。日本に来たことはなく、「日本語は独学です」と言う。外人特有のへんなアクセントもなく完璧な日本語である。今回のメンバーは、男5人・女6人で、ツアーリーダーはキリマンジャロ・ヒマラヤのエベレスト山群展望3大ピーク・バルトロ氷河でお世話になった島方さんである。メンバーの中には台湾の玉山・雪山で一緒だった立川さんと平尾さんの名物ばあさんコンビがいた。台湾の時はただのおしゃべりババアと思っていたのであるが、飛行機の中で気軽にスチュアードのお姉さんに英語で話しかけたりして外国慣れしている。立川さんの



イスラム寺院を案内するカワさん

マラケシュの寺院で全員集合



娘の旦那はデンマーク人であるとのことで、英語く
らいのことでオタオタすんなよといったところか。

カサブランカからモロッコ最初の宿泊地であるマ
ラケシュまでは高速道路を通ったせいもあるかもし
れないが、人影が極端に少なく生活感が感じられ
ない。国の方針ということで、このあたりの建物は
全て薄桃色に統一されている。カワさんがその理
由を説明してくれたが中身は忘れた。

ツアー1日目はマラケシュの市内を見物した後に、
ツブカル山の登山口であるイメルルの町（1740m）
への移動である。世界遺産の広場などを見るがあ
まり関心がないのでよく覚えていない。カワさん
は敬虔なイスラム教徒であり愛国者でもあるので
（ここではそれが当たり前であるが）、一生懸命
に寺院のことなどを説明してくれるので悪いよ
うな気がする。モロッコではどこの都市に行
ってもコウノトリが建物の最上部に羽ばたいて
いる。この光景は他の都市でも何回も見た。イ
メルルの町はツブカル山への唯一の登山基地
である。この時期はちょうどサクラン

イメルルの町



建物最上部のコウノトリ

ポ（アメリカンチェリー）の収穫シーズンであるので出荷の車なども見かけて、我々も食後のデザートなどにお相伴になった。ここからは食事も我々の登山スタッフが作ってくれる。モロッコではタジン鍋とクスクスが代表料理であるが、山のガイドたちによって、レストラン並みの腕前で我々の食卓に供せられた。

登山初日のツブカル小屋までの行程は、街中の道歩きから始まって、森林限界を超えると岩のゴロゴロしたところをひたすら進む。大きな荷物はロバが運んでくれるので、我々は水などの自分のその日の荷物だけを持って楽ちんな山登りであるはずなのであるが、この2年くらい付いて行くのが精一杯になってきた。登山道は世界中の人が来る山であるのでよく整備されている。スペイン人やドイツ人と出会う。地中海を挟んで比較的近いので気楽に来れるようだ。なかにはカナダ人もいた。こちらは気楽というわけにはいかない。私もいろいろと世界中の山を歩いているが、ドイツ人とカナダ人にはよく出会う。山とか旅行好きな国民性なのであろう。たまたま村上春樹の本を持って行っていたが、彼の本にもバックパッカーとしてよく出会うのはドイツ人であり、イタリア人にはめったに会わない。と書いたものを読んだことがある。私も同感である。

ツブカル小屋は石造りの立派な小屋である。内部も2段ベッドで快適である。シャワーやトイレの設備もきれいに整えられている。ただし日本の山小屋と違って、食事と布団の用意はない。しかし我々リッチマン日本人は、同行のガイド達が食事の用意をしてくれるしシュラフはロバが運んでくれるので、日本の山小屋と同様のスタイルで山を楽しむことができる。モロッコはイスラム教国であるので酒は禁止であるが、マラケシュで買ったスーパーにはちゃんと酒のコーナーがあって酒の種類は何でもそろっており、なかには日本酒“菊正宗”もあった。こちらの金に換金した540ディルハム（約6000円）のうち240ディルハムを投じてジョニ黒ハーフサイズをしっかりと仕入れてき



クスクス



ロバの荷運び



ツブカル小屋

た。ツブカル小屋は3207mであるので、まあ高山病はないだろう。

ツブカル山(4167m)の山頂へのアタックは約900mの高度差であり、1日かかりでやるのであるから楽勝のはずである。周りの外人さんたちの中には頂上をアタックしてその日のうちにイメルルまで下ってしまう人が多い。しかしこの程度でも最近の私には結構こたえる。登りが急に感じる。南アルプスの高山裏から荒川前岳への登りに似ているところをひたすら登る。ただし南の場合はお花畑がきれいであるが、ここにはゴロゴロ岩しかない。三重から来た磯山さんの周りは、いつも笑い声が絶えない。登りがきつくなってみんなの声が途絶えても、この人だけは明るく笑いながらきつい登りを楽しんでいるようにさえ見える。バテているときは稜線に出てから山頂に至るまでが、まだか、まだかと次々にピークが表れていつ頂上に着けるのかカリカリすることが多い。この日もそんな感じであったが、ナントカ頂上には着いた。他の皆さんも余力に差はあったが全員



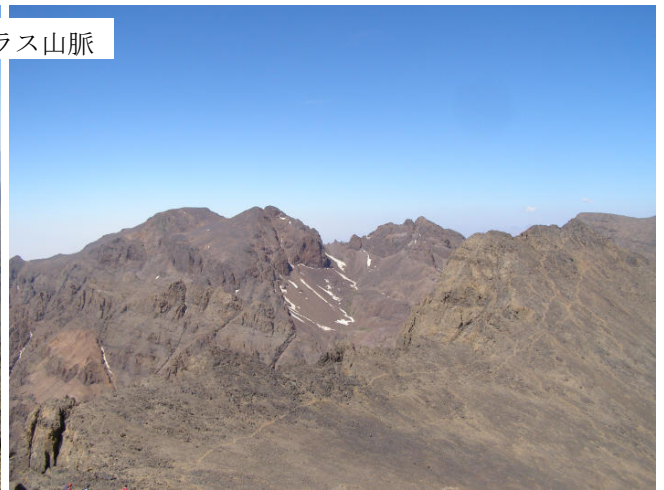
ツブカル山の登り



ツブカル山山頂で台湾仲間と



アトラス山脈



登頂した。島方さんがリーダーを務めたツアーは登頂率が高い。山頂で立川・平尾の台湾ババーズと記念写真を撮る。やはりアトラス山脈の一番高いところに立つということは気持ちが良い。

下りは、同じところを歩くのであるからやはり気楽である。天然



ブーケのような花



フレッシュオレンジジュース

ブーケといった咲き方をしているサクラソウのような花（例によって花には弱い）や、オレンジ 6 個で一杯になるフレッシュオレンジジュースを楽しみながら下りる。

さて、今回の山はこれでおしまい。あとは砂漠の中の名所見物である。ガイドも入れて 15 人を乗せるバスは大型であるので、一人で 2 席とってもまだ余る。これが 1 日に 350km とか 430km 走る。運転手は当然 1 人である。まあ余計な心配はしないことにしよう。いやなら旅になんか出なければ良い。高速



我々のバス



道脇の夾竹桃



アイト・ベン・ハッドウ



果てしない砂漠

道路脇には、モロッコの平和で安定したところを誇示するように、夾竹桃が咲き乱れる。砂漠というと砂ばかりをイメージしてしまうが、砂砂漠・陸砂漠・岩砂漠といろいろあるらしい。世界遺産であるアイト・ベン・ハッドゥは、まあ一つのカスバだ。脇からマレーネ・ディートリッヒのお姉さんが“坊や、ちょっと寄っていきなよ”と声をかけてきそう。ここは映画“アラビヤのローレンス”など数々の映画の撮影に使われたらしいが、本物は世界遺産であるので手を加えることは許されない。外部にセットを作ったらしい。

モロッコの代表的な料理は前出のクスクスとタジン鍋である。トンガリ帽子のような蓋をして蒸し料理である。トンガリ帽子の上のほうに湯気が上がって行って、上で冷やされるので水流になって降りてくる。だから油を使わないで良いのでダイエット料理として日本でも女性を中心に人気が高いらしい。中に入るものは何でもよいらしく、牛肉であったり卵料理であったりする。しつこさがなくなかなかいける。クスクスとタジン鍋が変わりばんこに出てくるような感じであった。両方とも私の好みであり、食事はいつも満足であった。

モロッコはイスラム圏であるので、女性はみんなベールをかぶっている。しかし顔まで全部隠しているのはよほど年取った人ぐらいで、大半の女性は顔まで隠していることはない。ただし写真を撮ることは許されず、必ず断って許可が得られた場合のみ写すようにと、カワさんや島方さんからしつこく注意を受けた。まあこの写真のようにバスの中から隠し撮りをするのが精一杯である。モロッコ人というのは、アフリカにあるということだけで黒人なのかと思っていたが、ほとんどアラブ系の顔である。もとの住民であったベルベル人とアラブ人で大半が構成されている。もっとフランスの影響が強いのかと思っていたが、フランスの植民地であったのは1900年代の約40年ほどだけであったみたいだ。

砂漠が、太古の昔は海の下であったことを証明するように、アンモナイトを封じ込めた化石が土産物として売られている。店のお兄ちゃんがナナジュウでいいよと言って声をかけてくる。なるべく現地で買い物をするので、その国の経済活性化に役立つように心がけているので、50ディルハム奮発して灰皿のようなものをピーナッツ入れにしても良いと思



タジン鍋



ベールの女性



アンモナイト



って買った。

サハラ砂漠の入り口の街エルフードから、四駆でメルズーカ大砂丘に行って砂漠の夕日見物をする。四駆が止まったところはラクダのたまり場である。ここから夕陽が見える砂丘までラクダに乗って行く。といっても、よく飼いならされたおとなしいラクダに、ラクダ使いがしっかりガードしてくれているのであるから、まあ楽勝である。20分くらいかけて、サハラ砂漠の中を夕陽の丘までしゃなりしゃなりと歩く。昼間は暑いので、朝日を見るか、夕陽を見るのを、ラクダツアーのイベントにしているようである。我々はその夕陽のほうを経験したわけである。ラクダ乗りイベントが終わると、ラクダ使いのお兄ちゃんから、当然のように20ディルハムのチップを要求された。バラ銭が18ディルハムしかなかったのを見せると、まあいいやといった感じで受け取った。あっさりしていて良い。

内陸部の散策が終わると、再びアトラス山脈を越えて大西洋側のモロッコの大都市がたくさんある地域に戻ってゆく。



タジン鍋などの陶器を作る工場見学などもツアーに組み込まれている。もちろんお土産品として買わせたいという意味が含まれている。絵付をやっているのは綺麗な女子大生のアルバイトであるという。見せることを意識して、なかなか抜け目がない。

カワさんの出身地であるフェドの街では旧市街にあるカスバの奥深くまで案内してもらった。道が複雑に入り組んでいるうえに、荷物運びのロバが狭い道を通ったりする。“迷った時には絶対に動かないで、その場にじっとしててください。”と注意される。カワさんの他にも何人か地元の人を配置させて、我々がはぐれてしまわないように見張っていたようである。フェドの人の他にも、我々と同じような観光客と思われる人も見かけたが、どうやってここから抜け出すのであろうか。やはりその国のことを知ろうと思ったら、こういったところに来ないとわからない。ちなみに、この後に行ったカサブランカにも旧市街のカスバは有ったようであるが、カワさんの危険だからという判断で案内してもらえなかった。敬虔なイスラム圏といわれるモロッコも、綺麗ごとだけで成り立っているわけではなさそうだ。

旅の最終コースは、モロッコでの入口であり出口になるカサブランカである。カサブランカとは「白い街」という意味らしく、その昔ヨーロッパ人が海から街を見通した時に白い建物ばかりであったのでその名前が付いたらしい。世界で2番目に高いというミナレット（イスラム教の光塔）をカワさんが自慢げに説明してくれる。

その夜、ツアー最後の夕食は私の68歳の誕生日でもあった。西欧のレストランでは、客に誕生日の人が居ると、キッチンスタッフが鍋やフライパンをたたきながら歓迎してくれるので期待したが、そんなことやってくれなかった。イングリッド・バーグマンやマレーネ・ディートリッヒも今のモロッコにはいなかった。

(完)



陶器の絵付け



カスバ

ミナレット



カサブランカの白い街

